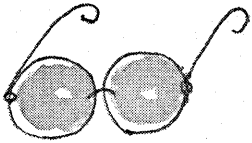
私の保育

井上紀枝



一九七四年二月　私のある朝

「おはよう、ヤッちゃん」
『メガネゴリラおはよう』
「なんだ、なんだ」
ヤッちゃんのほっぺをつつく。ライダーキックでとびかかるヤッちゃん。
「ヒャー　まいった。こうさん、こうさん」
『おーい、イノウエー』遠くから呼ぶ声。
「ムッ？」（イノウエなんて、なれなれしいな、おかあさんたちいないからいいけど……ちょっとばかりあたりをキョロキョロみまわして、おもむろに呼び声の主の方へ近づく。）
『イノウエったらー』
「……（無言のまま腕ぐみをする）」
『あの、イノウエセンセー』
「なーに」
『じてんしゃのってい？』
「小学校の体操の人がいなかったらいいよ、アッ、たいちゃん、べんとう出した？」（暖飯器で暖めるため）
『いけね、わすれた』
「ほら、また」
走っていくたいちゃんのお尻をパチン。
『せんせ、せんせ、せんせ』
「あっ、あけみちゃんおはよう」

『せんせ、画用紙使っていい？』
「いいよ、いつものところ。あっ、ないね、引き出しから出していいよ」
『せんせー、外へいってきまーす』
「どーぞ」
『せんせー、サッカーしよう』
「お仕事すんでからすぐいくから、先に友だち集めて始めてよ」
『せんせー。たけひさ来てない？』
「まだよ。あの子おそいから。あっ、来たよ、ホラ」
『のりえちゃん、あそびましょ』
「びっくりしたへへへへ」
『エへへへ……』
あちらにひと声、こちらにウインク。保育室から遊戯室、玄関へとドタバタ走り回って、朝の三十分はあっという間にすぎていく。年少組の三学期ともなると、ほとんどの子が、カバンを置くのももどかしく、友だちを呼び合い、遊びに入っていく。その日のおもな活動の予定時刻まで、私もあちこちに顔を出す。
たかちゃんがコマを持っている。
「あっ、ほんとのコマ、きみまわせるの？」
『あったりめえだ、みてろ』
すばやい手つきでヒモをまく。
『どいてろ』
サッとコマをなげて、あっ、ぶつかると思った瞬間、ヒモはへびのようにシュッと先端を丸めて、コマを引き戻す、と、コマは床の上でフラリともしないでまわっている。私も含めてまわりをとり囲んでいた数人の子は声も出ない。一、二秒の沈黙の後、
「やるー、たかひろ、すごい。先生にもやらせてよ」
『せんせーなんかにできないよ』
「やってみなくちゃわかんないよ、早くやらせて」
コマをひったくるようにしてヒモをまき始める。ところが円錐形の斜面の上をヒモはすぐにすべりおちてしまった。
『ほら、みろ、こうすんだよ』
「おかしいな」
イノウエジャイアントができないことがわかると、たかひろは意気揚々、じらしにかかる。
『ほら、いいか、こうやって、上が巻きついてないとダメだぞ』

「いいからかしてよ」
『小指にこうすんだぞ』
「わかったよ、早く」
『それっ』
「それっ」ヒモはもつれてコマは無残に放り出される。
『バカー、コマなげて、ひも引くんだよ』
「なげてひくか、うん、それはうまい教え方だ、たかひろ、もう一回」
どうにか回る。たかひろは大きな生徒が意外に早く回したのでちょっと変な顔をしたが、すぐにいろいろとケチをつけ始めた。この場はたてまつるに限る。何しろ、たかひろのシュッにはまだとうていかなわないから。
「たか坊はコマの先生だ、大きい組になったら、みんなこのコマ買ってもらって、たか坊に教えてもらおうよ」
『そうだね』(まわりの子、口々に)
たかひろは大得意
『ウヒヒヒヒ、おれ、にいちゃんに教えてもらったんだ。あしたキゴマ持ってきて見せてやるよ』

三年目と六年目

少々乱暴な言葉づかいのこれらのやりとりは、多くの保育室ではほとんど聞かれないと思う。父母会の席上〝このごろことば使いが悪くて、友だちを呼びすてにして困ります〟などと言われると私は少々笑ってごまかしながら「実は私がかなり悪いので……」と言うことにしているが、初めの三年間ぐらいはこんなにひどくはなかった。四年目に入って二回目の年少児を受け持ったあたりから、何となく、自分のペースとやり方が身につき始め、それが言葉のやりとりの中にも現われ出した。サッカーなどをしてこちらも夢中で走っているときなど特にひどい。
「ヒデ、もっと前、あっ、横、ソレッ、あっダメだ。オーイ、いくよ」
元来早口なのが、それこそ機関銃のようにことばがとび出すから、子どもははじめはキョトンとしているが、二年間もつきあっていると教師と同じペースになる。年長組ともなれば、口からつばをとばしてやりあうことにもなる。もう少しゆったりとやらなければと思っているうちに六年目に入ってしまった。
港区の公立幼稚園に来て六年、この間私には保育の上で大きく二つの節(せつ)があった。最初の二年間は保育という仕事に慣

れるだけで精一杯だった。二年目に園独自の教育課程づくりが始まり、わからないながらもそれにむしゃぶりついていった。三年目、内容的に一つ目の転期が来た。この年、園全体で公開保育をやることになって、幼児期の音楽教育としてわらべうたをとりあげることになった。私はある研究会に入り、個人的にも勉強を続ける中で、わらべうたと幼児期の音楽教育というものに少しずつかかわっていった。その中で、子どもの見方や発達に合った教育内容や教育方法とは何かを学んだ。そして遊びを通して、すべての子どもたちがうたうことの楽しさ、すばらしさを知っていく姿を目のあたりに見て、ひとりひとりの子どもの持つ可能性が本当に具体的に切り開かれていくとはどういうことなのかを教えられた。これらのことは、その後音楽だけではなくほかの多くの領域問題を考えるときの基本となった。

四年目、五年目と、園の教育課程づくりは積み上げられ、私の新しい課題もふえた。その間ずっと私を悩ましつづけたものはひとりの教師の手には余りすぎる四十名という子どもたちの数だった。四十名という数の中で個々の子どもたちの関係をどう結びつけながらクラスとしてまとまった集団にしていくのか、のびのびとしてはいるが、自分の力をまだまだ完全には出しきっていない子どもたちに何をどうしたらいいのか。

六年目、私はまた年少児を受けもって、わらべうたの遊びをしながら、やっと一つのことに気がついた。子どもたちだけで輪を作って、〝あぶくたった〟などを遊ぶとき、十二、三人だと、輪がほどよく保たれ、握った手の間の緊張感も快適なこと、十五、六人を過ぎるとあっちがはみ出し、こっちが切れして遊びもスムーズに運ばないこと、ほどよい人数のときは、お互いの声をよく聞けるし、声をそろえることのこころよさももわかること、などなど。

今まで私は自主的に考え判断し、行動できる子どもと子どもの集団を目標にして、簡単に口にしていたが、そこにいくには子ども自身が自分とみんなとの関係を把握でき、心をゆき届かせられるような集団の人数がなければならない。わらべうたに限らず、子どもたちがいろいろなものを経験してそれをもとに思考し行動するためには、四十という数は彼ら自身に把握できるものではないし、負担が大きすぎる。おとなの四十名の集団を考えてみても、その中で同じ目標をもち、討論を起こしていくことはなみたいていではない。まして幼児にそれを強いているのだから事は重大だ。

私は一クラス四十名という数を今までは教師の側から見ていたのだが、それが教育の場で、子どもにとってどんなものだったか、なぜ四十名ではいけないのかが、実感としてわかった。

しかし、実際は私の眼の前には毎日四十名の子どもがいる。私の目標を子どもたち自身の目標にするために具体的なわかりやすい内容と方法を差し出さなければならない。私はわらべうたをするとき二十名ずつ交代で時間をずらして二度やる。他の活動のときも内容に応じてできる限りそのような方法をとる。だが根本的なことは人数を少なくすることだ。

保育と組合運動

一クラスの幼児数を現行よりも少なくしてほしい。（もちろんその分学級数をふやしたり、園数をふやしたりして）というのが私の切実な要求になり、同時にそれを要求するのが教師としての責任であると痛感したとき、ひとりの力ではあまりに弱いことに気がついた。私が組合に入ってからの年数は保育歴とほぼ同様だが、そこで得たことは、自分たちの要求は自分たちが動かなければ（主体的・自覚的に）解決しないことと、仲間と語り合い学び合うことのすばらしさだった。次々にわいてくる知恵と力。私は毎日の保育と組合での活動を切り離しては考えられない。教師自身が生き生きとしないで、また、自主的・主体的に思考し行動しないでどうして子どもたちにそれが望めるだろうかとも思う。

私はよい職場と仲間に恵まれた。そこは私の支えのひとつになっている。毎年々々私の課題はふえる。今まで考えてきたことは私の保育者としての六年間のほんの一部で、これからやりたいことやらなければならないことは山ほどある。たとえば、教師の数があまりに少なく過重労働になることからまわりの仲間が（全都的・全国的にそうだろう）バタバタと倒れたりやめたりしていること、結婚して子どもができてからも働き続けるための保育所や適当な住居がないこと、お母さんたちと一緒に本当のＰＴＡ活動とは何かを考えたいこと、小学校の先生たちともっと教育内容のことで話し合いたいこと。保育園との関連を考えたいこと、クラス集団づくりにもっときめ細かくとりくみたいこと、保育室をもっときれいにすること（！）などなど。あまりやることが多すぎてまた走り出しそうだから子どもたちの忠告に耳を傾けよう。

『せんせー、あわてんぼうとおこりんぼを直してください』

（港区立南山幼稚園）